

2014年2月2日 主日礼拝説教（要約）

聖書 ルカによる福音書3章1～6節

説教「荒れ野で叫ぶ者」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

主イエス・キリストが公の働きを始められるにあたって、まず洗礼者ヨハネの説教と洗礼があったことを、4つの福音書はどれも語っています。そして、ルカによる福音書は、主イエスの誕生の時と同様に、洗礼者ヨハネの活動と主イエスの登場がどういう時代状況であったかを丁寧に報告してくれています。

皇帝ティベリウスの治世の第15年とは紀元28年から29年にかけてと考えられます。主イエスの記録は当時の歴史文書には出てきません。まったく無視されています。けれども、ルカは当時のローマ皇帝の名をあげ、それはこの世のどのような支配者の時代、どのような状況であったかを記すのです。当時ユダヤ地方を直接的に監督統治していたのは、ローマ総督ポンティオ・ピラトでした。そして、この地方はあのクリスマス物語に登場したヘロデ大王の子たちが分割して統治していました。そしてもう一つ、ユダヤの宗教的な状況としては、アンナスとカイアファが大祭司であったとあります。大祭司が二人と言うのはおかしいのですが、カイアファは現職の大祭司で、アンナスは辞めてからもまだ影響力をもっていたようです。これらの人物がここに記されることにより、ルカは、主イエスがこの世界の権力がうごめく中に、確かに来てくださり、御業を始めくださったことを証しています。

さらに、ポンティオ・ピラト、ヘロデ・アンティパス、カイアファといった人々はこのあと主イエスの苦難と死の場面で登場してきます。ですから、彼らはただ時代背景を語っているだけでなく、洗礼者ヨハネと主イエスの大いなる苦難を予感させるものでもありました。

まさに、そのような時代の中で、「神の言葉が荒れ野でザカリアの子ヨハネに降った」のです。この言い方は、「主の言葉がエレミヤに臨んだ」とか「主の言葉がエゼキエルに臨んだ」と言われたのと同様に、預言者の召命を表す定型句で、直訳すると「神の言葉が出来事になった」「神の言葉が事件になった」という表現です。久しく聞かれなくなっていた神の言葉が、この世界の中で一人の人物に臨み、出来事となっていくのです。神の言葉が動き出したのです。

この出来事は荒れ野で起こりました。荒れ野は出エジプトを率いたモーセ以来、神の啓示の場所でした。イスラエルが神の民として、召し出され、愛され、訓練を受け、養われたのは荒れ野でした。荒れ野の40年なしに、イスラエルの歴史はなかったといっ
てよいでしょう。そこはしばしば救いの原点として思い起されました。「わたしは、あなたの若いときの真心、花嫁のときの愛、種蒔かれぬ地、荒れ野での従順を思い起こす」（エレミヤ 2：2～3）。神への純粋な愛と従順のあったあの原点に立ち帰れ、と預言者は呼びかけます。また預言者は、将来訪れる救いを約束するときにも、我々は荒れ野に

導かれて、そこで神の御声を聞くのだと約束していました。

ついに約束の時がきて、神の言葉は荒野で神の民に臨むのです。救いの御業が新たに始まろうとしていたのです。洗礼者ヨハネの宣教活動は、まさに預言者イザヤの書にある預言の成就なのだということです。「荒野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。谷はすべて埋められ、山と丘はみな低くされる。曲がった道はまっすぐに、でこぼこの道は平らになり、人は皆、神の救いを仰ぎ見る』」(4~6節)。

これは、イザヤ 40 章 3~5 節からの引用で、長く苦しいバビロンでの捕囚時代が終わりとなり、神が囚われの民を故国に連れ戻してくださることを告げる解放の言葉です。ひとたび完膚なきまでに打ちのめされたイスラエルでしたが、神によって罪赦され、故郷に帰還し、神の民として新しく生きる道が開かれたことを高らかに告げているのです。

荒野と、そこにある山や丘や谷や、でこぼこで曲がりくねった道は、ただバビロンからエルサレムへの道をさすだけではなく、私たちの置かれている世の中のありさまと霊的な状況を指しているといつてよいでしょう。荒野の現実の中に神の言葉が語られ、御言葉が出来事となっていくときに、荒野の姿は変えられていきます。かつてマリアが、聖霊に導かれて神の御業を讃美したとおりです。「主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます」(ルカ 1:51~53)。

また、ザカリアは聖霊に満たされて、幼子ヨハネの働きを預言して歌いました。「お前はいと高き方の預言者と呼ばれる。主に先立って行き、その道を整え、主の民に罪の赦しによる救いを知らせるからである」(ルカ 1:76~77)。そのような神の御業が始まったのです。

「人は皆、神の救いを仰ぎ見る」と言われます。イスラエルの人々だけでなく、今やすべての民を救う神の御業が始まっていることが語られます。洗礼者ヨハネは、主イエスの福音を荒野において、主に先立って響かせたのです。ヨルダン川に集まってきた人々は、ヨハネから救いのまえぶれを聞いたのでした。

私達も今、21 世紀の荒野にいます。私達を取り巻く、政治的、経済的、社会的、宗教的環境はまことに険しいものがあります。でこぼこの、先がよく見えない道を、「主よ、いつまでなのですか」と言いながら歩まねばなりません。けれども、荒野こそイスラエルが神と出会ったところ、預言者に神の言葉が降ったところ、主イエスが救いの御業を始めてくださったところ、御言葉を待ち望み、御言葉に聞き従うところに、いのちの道が少しずつ開かれていくことを信じて歩んでいきたいものです。